

千葉県子ども病院におけるこどものたばこへの認識：親・職員との比較

千葉県子ども病院 鈴木修一 松岡真里 尾出真理子 伊達裕昭

当院に通院する患児の多くには慢性疾患があり、防煙教育の重要性は一般集団よりも高いと考えられる。患児の防煙教育効果を高めるためには、患児のたばこに対する基本的な態度や性向を明らかにすることが重要と考え、われわれはアンケート調査を行った。

方法

患児、患児の保護者（患児の年齢を問わない）、職員全員を対象に無記名選択式質問票を配布した。小学 4 年生以上の患児の回答と親・職員の非喫煙者、卒煙者、喫煙者の回答を以下の 7 項目について、同居家族の喫煙者の有無も考慮し比較した。

- 1 たばこの煙のにおいが、好きですか。
- 2 たばこを吸うことは、体に悪いと思いますか。
- 3 病院の行き帰りに受動喫煙がない方がよいですか。
- 4 家族がたばこを吸うことについてどう思いますか。
- 5 医師がたばこを吸うことについてどう思いますか。
- 6 将来、たばこを吸いたいですか（喫煙者を除く）。
- 7 こどものための禁煙外来は必要だと思いますか。

結果

回収率は患児 21.3%（回収数 140）、保護者 79.6%（同 524）、職員 75.4%（同 424）であった。患児の多くは小学 4 年生未満であったため、回収率は低率となった。患児の両親の世代と比較するために、保護者より父母以外からの回答を、職員より 50 歳代以上の回答を除いた結果、解析可能な回答数は患児 122（小学生 76, 中学生 22, 高校生 15, 不明 6）、親 455（母 391, 父 64）、職員 330（女性 260, 男性 70）となった。喫煙率は、患児 0%, 親 27%（母 21.2%, 父 56.3%）, 職員 16%（女性 13.4%, 男性 25.9%）、親・職員の非喫煙者数は 503、卒煙者数 112、喫煙者数 171 であった。

1 親・職員の非喫煙者・卒煙者・喫煙者との比較

患児の回答は親・職員の非喫煙者に類似し、卒煙者や喫煙者よりも強い禁煙傾向を認めた。しかし、患児の回答は医師への禁煙要求が有意に強く、喫煙に対する関心が有意に強い点で、非喫煙者とも異なっていた。

2 同居家族の喫煙者による影響

親・職員の非喫煙者では、質問 4 で同居家族に喫煙者ありの群の家族への禁煙要求が弱い他に、なし群と有意に異なる項目を認めなかった。これに対し患児では質問 5・7 以外の 5 項目で、同居家族に喫煙者あり群の回答が、なし群よりも有意に禁煙指向が弱かった。

3 最も禁煙指向の強い回答をした質問項目数

親・職員の非喫煙者・卒煙者・喫煙者では同居家族の喫煙者の有無により違いを認めなかったが、患児では家族に喫煙者がいる群において、最も強い禁煙指向の回答数が有意に低かった（図 1）。

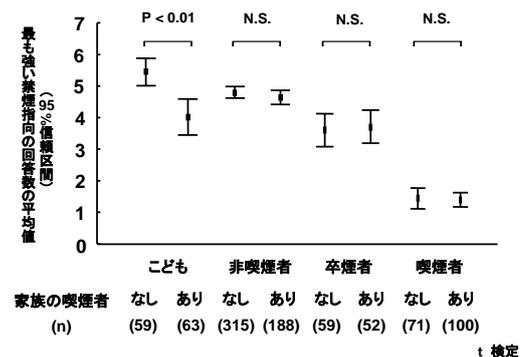


図1 家族の喫煙者の有無による最も強い禁煙指向の違い回答数の違い

結論

患児のたばこの認識は親や職員の非喫煙者に類似していたが、患児の喫煙への関心は親や職員の非喫煙者よりも強く、患児の禁煙指向は家族の喫煙者の存在により低下した。患児への防煙教育を効果的に行うために、家族の禁煙指導は有効である可能性が考えられた。